

4章

【添削課題】

出典：慶應義塾大学・文・99年

解答

問1

モシ族は、人間とものを区別し、ものが人間のために犠牲になるのは当然とする徹底した即物的思考を持つ。この思考を人間中心主義とするのは、世界の根源的力ウエンデ、それと人間との仲介をする祖先の霊や精霊キンキルシをものを頼む交渉相手として擬人化し、その上で人間社会と同様、打算的に取り入るからである。つまり、人間とものとの間に一線を劃している点、また、ものを動かす力を人間の望むようにまるがかえにして働きかける対象として擬人化する点において人間中心主義なのである。こうした人間中心主義により、ものを動かす力を擬人化し、仲介者を通して即物的に取引しようとする関係が、モシ族独自の「もの」と「ひと」の関係である。

問2

【文章例①】

亡骸をハゲワシなどに食べさせる鳥葬が現在でも行われている地域があるが、これを野蛮で非人間的な方法だと考える傾向が日本人にはある。しかし人間の遺体を完全に焼き尽くすためには大量の燃料と手間を必要とする。現代の日本では重油を使って八百度という超高温での焼却処理を施しているが、そのような超高温焼却施設など存在しなかった古代社会において、火葬が一般には行われなかったのはむしろ当然というべきである。また、鳥葬には亡くなった者の魂を天に返すという意味合いもこめられるようになったため、現代に至るまで世界各地で継承されてきたのである。私たちは異なった文化に対して自文化の観点からだけで一方的な判断をするべきでも、異文化に盲目的に迎合するべきでもない。各々の文化の特徴がどのような物質的文化や技術的發展過程との関連の中で生み出され、

変化・継承されてきたかを冷静に分析してゆく姿勢が不可欠なのである。

【文章例②】

筆者は、モシ族の文化を自然という彼らの言語体系にない概念により論ずる問題を指摘する。それは理解する側の枠組、この場合西欧近代の二項対立的なものの見方によって、一方的に対象を理解したつもりになりがち、と示唆する。

確かにそれは我々もよく陥りがちな問題だ。日本社会に定住しようとする異文化の人々が、残飯や食品ごみを「土に返す」習慣に則って、決められた袋に入れ、決められた日に捨てないからといって、「汚い」「非文明的」等と決めつけてしまう眼差しや姿勢が我々にはないか。それが彼らの文化を理解することから我々を実は遠ざけている。

ただ、そうした見方を正すために、自文化の枠から完全に自由になり異文化の思考枠組を完全に理解すべきであり、筆者が言う異文化理解の理想的な文化相対的主義的見方をすべきだ等とは易々と言えない。そう言う人間こそ、異文化理解の困難さを知らないのだと思う。

解説

課題文は、文化人類学者、川田順造の『サバンの博物誌』(Ⅱ)ものともひと―依存のなかのはたらきかけ―からの抜粋である。約四九〇〇字の長さで、随筆文であるせいか文章の論理構造がやや把握しにくいだが、決して難解ではない。

課題文筆者の川田順造の文章は、異文化理解や西欧近代のパラダイム(例えば、「人間―自然」と二項対立的に世界を認識してしまうものの方・考え方)の見直し、といったテーマの課題文として出題されることがある。例えば、九八年度の東大文三・後期日程では、『曠野からアフリカを考える』の抜粋が課題文として提示されている。川田の文章ではないが、九九年度の早稲田大学・人間科学の小論文課題は、「南北問題の本質」に顕在化している、西欧の知識体系を普遍とし、そうでない体系をローカルとする二分法的認識を問題視した文章が提示されていた。参考になるだろう。

1 設問要求

西アフリカ内陸部のサバンナに居住する農耕民、モシ族（人口約二〇〇万）について文化人類学者が書いた随筆集の一章である問題文を読み、以下のそれぞれの問いに答える。

問1 モシ族における「もの」と「ひと」の関係を要約して述べる（三〇〇字以内）。

問2 自分たちと異なる文化を理解するための心構えを、筆者の見方を取り入れながら、具体的な事例をまじえて述べる（四〇〇字以内）。

◎設問分析◎

制限時間内に、約四九〇〇字の課題文を読解し、問1の要約問題と問2の論述問題を仕上げなくてはならない。問1・問2とも字数は少ないが、字数が少ないからこそ、どう要約すべきポイントを整理し簡潔にまとめるか、設問要求を充たしつつ論ずべきテーマについて自らの見解をどう展開していくか、考察・検討する時間がかかる。与えられている時間を効率よく使うためにも、予め、二つの問題の設問文で要求されていることを分析・確認しておきたい。要するに、問1に対応するために課題文を読み、要約文を作成し、さらに問2の論述問題に対応するため、さらにもう一度課題文を読み直す……などということがないようにしたい。それでは二度課題文を読むことになり、時間配分がかなり厳しくなる。

本課題のように問題が二題ある時は、それぞれ別個に考え取り組むのではなく、二題合わせて、出題者が受験生のどのような力をためているのか、総合的に判断したい。以下、二題の設問文から、要求事項とその背後にある出題者の意図を整理しておこう。ただやみくもに課題文を読み始めるのではなく、要求されていること、課題文から読み取るべきこと、そして出題者の意図を十分認識してから、課題文読解に取り組みたい。

【各問で要求されていること・課題文から読み取るべきこと、および出題者の意図】

問1の要求⇒要約文の作成↓要約すべき対象（読み取るべきことⅠ）⇒「モシ族における『もの』と『ひと』の関係」

*問1の出題意図……正確な課題文読解力のチェック

問2の要求Ⅱ「自分たちと異なる文化を理解するための心構え」について（自分の見解）の論述

↓それを行う上での付随的要求

- ① 課題文筆者の（異文化を理解する際の）見方を取り入れながら、（↓読み取るべきことⅡ）
- ② 具体的事例をまじえる

*問2の出題意図……「異文化理解の心構え」を主題とした自らの見解を、ただ自由に（一方通行的に）述べるのではなく、課題文

筆者の見解・見方を踏まえ、それと関連させる形で、展開する力を持つか。

・抽象論に陥らず、自分の「異文化」との関わりを対象化し、それを具体的事例として論述に活かす力を持つか。

2 問題へのアプローチ

【手順1 特に読み取らねばならない点を十分認識した上で、課題文読解に取り組む】

「◎設問分析◎」で確認したように、問1・問2の要求から、特に正確に読み取らねばならぬことは、以下の二点であることがわかった。

- I モシ族における「もの」と「ひと」の関係（がどのようなものであるか）↓要約文作成のため
- II 課題文筆者の（異文化を理解する際の）見方↓「自分たちと異なる文化を理解するための心構え」に関して自らの見解を論述する上で、それを取り入れる（参考にする）ため

【課題文の構造】

A 論点提示・筆者の問題意識（第①～⑧段落）

■筆者が関心を抱き理解しようとしている対象……サバンナに生きるモシ族の自然に対する強靱さ・一切の感傷を払拭した即物性

↓その具体的事例⇨家畜・家禽のいけにえの風習（その描写…②～④段落）

■その対象の分析（モシ族のいけにえの風習描写を素材とした日本人との比較分析）

モシ族の特徴……人間中心主義（あげすけでおおらか）

・人間とものをはっきり区別し、ものが人間のために犠牲になるのは当然という感覚⇨即物的思考を持つ。

日本人の特徴……人間エゴイズム（おおらかさを欠き、装われ、とりつくりわられた姿の露呈）

・（生き物への憐憫と共感にみちており）情緒的にもかかわろうとする。

■論点……モシ族の考え方を人間中心と呼ぶ時の、人間に対するものとは何か（果たして「自然」なのか）。

■筆者が問題意識を持つもの……

①西洋思想の中で概念化・定立され、人類普遍の真理と思込まれがちな「自然」対「文化」という二元論（↓普遍的真理ではないのでは？）

②（日常的快適さ、「アメニティー」とやらまでに）矮小化された現代日本の「自然」↓そこに人間のエゴイズムが露呈している（のではないか）。

B モシ族の考え方における、人間に相対するもの……論証（第⑨～⑳段落）

【モシ族の生活の分析】

◇生活空間

・（人間の生活領域）「イリ」⇨気心の知れ合った者同士が自分達で作ったものを使用して暮らしている空間。
・（「イリ」の外に広がる）「ウェオゴ」⇨人手の加わっていない荒れ野。精霊キンキルシ等のものが跳梁する空間。

異種族の人間「ブー・ゼンバ」の生活領域でもある空間。

◇人間の位置づけ ・動物と区別↓その理由…人間が「ヤム」(分別)を備えているから。

・人間と動物はもの(「ンプ」)から区別↓その理由…「ニョーレ」(鼻⇨生命)を持っているから。

◇精霊・祖霊・根源的力との関わり

・世界の根源的な力⇨ウエンデと生きている人間との仲介をする(祖先の霊及び) 精霊キンキルシ

・人間がその根源的力にいけにえを捧げて願うこと⇨穀物や土器等の人間の領域に属するものがよく出来ること

←

〈その関わりから見える顕著な特徴〉

(1) 打算的とりひき

(2) ふだんは目に見えず感知できないもの(⇨ものを動かす力)を、ものを頼む際に交渉相手として擬人化。

◇モシ族の社会関係(人間関係)に見出される二つの特徴

(1) 「まるがかえ」の論理(項目によって区別をしない)↓強者にベレム(とり入れる)することにより庇護を期待。

(2) 仲介の論理↓強大な者に対して直接にはなく仲介者を通してベレムする。

◇人とももののかかわり…右の二つの特徴、すなわち「依存の中の働きかけ」を原理として、「生きている人間の社会関係」と「人

とももののかかわり」は、ウエンデを頂点とした二辺をなしている。

←

* (モシ族では)もの自体は擬人化されず、人間との間に一線が劃されていることにおいて人間中心的。その反面、ものを動かしている力は、ものを望ましいように変えるべく、まるがかえに、人間が働きかける対象として擬人化されている点により人間中心になっている。

◇(日本との比較から) 課題文筆者のモシ族独自の「もの」と「ひと」との関係についての考え方…

- ・ものの最終原理としての唯一者で、ベレムの対象として擬人化されるウエンデへの依存。
- ・普遍的な、ものの原理の不在。

← ウエンデへの働きかけの適不適⇨仲介者・キンキルシの意見に応じたいけにえがその不適切を償う。

* (ものに人間が共感し、ものの中に潜んでいる本性や力をよりよく発現させるのに人間が手を貸すという日本的発想・考え方は) モシ族独自の人間中心主義により妨げられているとみることができ。

C 結論(第⑳・㉑段落)

■ 論点に対する結論(主張) …… 「自然」という、そもそもモシ語にない概念により、このサバンナの文化を論ずることが、一方的な枠組による対象の切りとりになりやすいことは明白である。

■ 結論から見える筆者の「異文化を理解するため」の見方・考え方についての言及……

- (1) (一方的な枠組による対象の切りとりは) 彼らの枠組だけを取り入れることにより「正しい」ものになるわけではない。
- (2) (異文化としての) 彼らの枠組と(見る・理解する側としての) 私の思考の枠組との、葛藤ないし相互作用のうちに、世界像ないしイデオロギーと、技術・物質文化とが、相互にもっているはずのかかわりを、具体的に明らかにしていくこと(の必要性)。
- (3) (2)は、筆者自身が、将来に向かって、未解決のまま抱えている課題の一つである(⇨そう容易に解決できることではない)。

【手順2 問1および問2それぞれの要求に対応する】

◎ 問1への対応◎

要求されていたことは、「モシ族における『もの』と『ひと』の関係を要約して述べる」ことであった。「モシ族における『もの』と『ひと』の関係」の特徴について言及されていた部分(前項「手順1」の【課題文の構造】の中の、特に*部分)を、三〇〇字

という制限字数の中で、課題文筆者の論理に従って（できるだけ文章の流れに沿って）、ポイントを押さえ（その関係の内実を説明する事項を整理し）、できるだけキーワードを活用し、簡潔明瞭で読みやすい自然な文章でまとめる。以下に、ポイントを簡単に整理しておく。参考にしてほしい。

◎モシ族における「もの」と「ひと」の関係について言及されていた事項・特徴◎

① 即物性・即物的思考……人間とものをはっきり区別し、ものが人間のために犠牲になるのは当然という感覚⇨即物的思考を持つ。

② 人間中心主義……①のような考え方を「人間中心主義」と呼ぶ、モシ族の「人間—もの関係」の内実（内容説明）

(ア) ものを動かす力の擬人化・打算的とりひき……

根源的力ウエンデ及びそれと人間との仲介をする祖先の霊、精霊キンキルシは、ものを頼む交渉相手として擬人化される。

その上で人間関係と同様に打算的に取りいる（⇨根源的力ウエンデに依存をしつつ働きかける原理）。

(イ) (ア)などの特徴がなぜ「人間中心的」なのかの説明……

・人間とものとの間に一線が割られていることにおいて人間中心的。

・同時に、ものを動かす力を人間の望むよう、まるがかえにして働きかけ得る対象として擬人化している点において人間中心的。

③ その人間中心主義⇨モシ族独自のものである点の強調……モシ族独自の人間中心主義。

◎問2への対応◎

【設問要求の再確認】

- | |
|---|
| <p>① 「自分たちと異なる文化を理解するための心構え」について、（自分の考えを）述べる。</p> <p>② ①を、筆者の見方を取り入れながら、行う。</p> <p>③ また、②のみならず、具体的な事例をまじえて①を行う。</p> <p>④ ①から③を、四〇〇字以内にまとめる。</p> |
|---|

■①と②の要求について考える

慶應義塾大学・文学部のこの問2として出される論述問題は、ある主題に関する自分の考えを「自由に」論じてよいタイプの論述問題ではない。問1の要約（説明）問題に取り組み、そこで君達受験生の内容把握力（正確な読解力）を試した上で、さらに論述テーマに関係する課題文の内容を踏まえさせた上で、それに対して自分はどうか考えるか、改めて議論の展開を練らせる、つまりは「縛り」の強い論述問題である（平たく言えば、あまり論述の自由度はない）。

本課題に沿って説明しよう。まず「自分たちと異なる文化を理解するための心構え」とはどうあるべきか、自分の考えを練るのではなく、課題文筆者はどうか言及していたか、踏まえたい。右の設問要求の②にあるように、「筆者の見方を取り入れながら」自分の考えを述べるということは、まず、筆者は「自分たちと異なる文化」を理解するためには、どのような見方・心構えが大切か、どのような点が問題となると指摘していたのか、まず踏まえ、それを君達自身の論述を展開していくスタートとしたい（設問要求でわざわざそれを明示しているということは、自分の見解を一方通行で述べるだけの論述ではなく、課題文の内容から正しく筆者の問題提起を読み取り、それとインタラクティブに議論を展開していく形の理解力・論述力があるかどうか、評価の対象にしているのだとも判断できる）。

以下、課題文筆者がモシ族の文化を対象にしつつ、「異文化を理解」するための見方・心構えについて問題提起していたこと、およびその問題に関してどう言及していたか、整理しておきたい。

A 課題文筆者が「異文化を理解」するための見方・心構えに関して提起していた問題

↓その文化にない概念等により、その理解しようとしている文化を論ずることが、一方的な枠組による対象の切りとりになりやすい点。そうしたことの問題性。

B そうした問題に対して筆者が言及していること

(1) そうした「一方的な枠組による対象の切りとり」は、その文化の思考の枠組を取りいれることによって、「正しい」ものになるわけでは勿論ない（↓「正しい」と呼べる理解の方法・見方が存在するののか。存在すると考えること自体の不毛性への気づき）。

(2) 理解しようとしている文化の枠組と自分自身の思考の枠組との、葛藤ないし相互作用のうちに、世界像ないしイデオロギーと、技術・物質文化とが、相互に持っているはずのかかわりを、具体的に明らかにしてゆくこと。

(3) (2)は筆者自身、未解決のまま抱えている課題の一つ（↓そう容易には実現できないことであることの示唆）。

AとBの内容は筆者の主張の核心部分である。それゆえ答案を作成する場合にも、この内容に即して具体的な事例を探し出し、構想を練ってゆく必要がある。

筆者はここで異文化を自分の文化の枠組によって一方的に切り取ってはならないし、異文化の側の思考の枠組を取り入れるだけであつてもならない、と述べている。

たとえば、「犬を食べる文化」「牛を食べない文化」など世界中には多種多様な食文化がある。これらの食文化を「犬を食べるなんて野蛮だ」「牛みたいにおいしい肉を食べないなんて愚かだ」などと、自分の食文化の枠組からだけで一方的に判断するべきではない。同様に「日本人も犬を食べるべきだ」「日本人も牛を食べるなんて野蛮だからやめよう」などと、異文化の枠組に迎合するのも誤りだ。

それではどのような態度が真の異文化理解のためには必要なのだろうか。ここでもう一度Bの(1)の筆者の言葉に注目してもらいたい。「世界像ないしイデオロギーと、技術・物質文化とが、相互に持っているはずのかかわりを、具体的に明らかにしてゆくこと」が筆者にとっての「課題」だと述べられている。たとえば「犬食」は、人間が生きてゆくために必要な動物性たんぱく質を摂取できる動物が犬以外にはあまり存在していなかった地域で多く生まれた。また、牛を食べない地域は平均気温も高く牛による感染症が高率で発生した地域に多い。

このように、ある文化の「価値観やイデオロギー（＝「牛は食べてはいけない」などといった考え方）」は、その文化が有している物質的文化が有する諸条件（物質的生産様式や技術）との必然的なかかわりの中で形成・発展してきたものである。

課題文の内容に即して言えば、日本で「人と自然との共感的な世界観」が生まれてきたのは、日本の自然が古来豊かで穏やかだったからである（「丹精こめて作物の世話をすれば、必ず応えてくれて豊作になるはずだ」というような発想は日本では普通の考え方である）。他方サバンナの厳しい自然環境に生きるモシ族にとっては、周囲の利用可能なものはすべて徹底して活用していかなければ生きていけない。そこから「すべてのものは人間が利用するための道具である」という世界観が生じたのであろう。

このように、ある一定の「世界観・イデオロギー」をもたらした「物質的諸条件」との因果関係まで客観的に把握することによって、はじめて「モシ族は野蛮だ」「日本人のほうが自然に優しい」といった日本人中心の偏見を避けることができる。同様に「モシ族はたくましい」「日本人もモシ族の力強さを見習うべきだ」といった迎合的な考えに陥る危険を避けることもできる。

筆者の考えは真の文化相対主義は「精神と物質の相互関係のあり方」を厳密に捉えていこうとする知的誠実さによってのみ可能となるはずだというものなのである。しかし、人間は感情の動物であるし、自分が生まれ育った社会の価値観や慣習から完全に自由になって異文化を評価し、理解することは非常に難しい。誠実に異文化を理解しようと努力すればするほど、自分がいかに自文化に規定された存在であるかを実感せざるをえないのが人間というものである。異文化の研究と理解に生涯をささげてきた筆者でさえ、課題文の最後で「私が未解決のままにかかえている課題のひとつだ」と述懐している言葉の重みを、私たちは十分に受け止めておく必要があるだろう。

■③の要求について考える……具体的事例の選択・分析

前項（**■①と②の要求について考える**）で述べてきたように、**問2**の問題は、基本的には、我々自身が異文化に接する時、自文化の思考枠組・価値観（あるいは課題文筆者が文中で述べていたような、「自然―文化」といった二項対立的・西欧近代的なものの方・考え方）を押しついたり、当てはめて「理解したつもり」（実は、それは理解ではなく、軽蔑や無視といった価値に満ちた「決めつけ」や無理解とも言える）になっていることの問題性に気づいたり、自己対象化、自己相対化し、異文化理解の「理想」的心構え（姿勢）の難しさを自分の問題として引きつけて考えさせようとしている。そうした出題意図を汲み、自分なりの「異文化」接触・理解の場面を、具体例として提示したい。ただし、具体例を提示すること自体が重要なのではなく、その提示の仕方、つまり目的（その具体例によってどういう主張を導きたいのか、その具体例の分析によってどういう点をクローズアップしたいのか、等）をどれだけ意識した提示の仕方ができているか、が重要なのである。

出典：慶應義塾大学・法・97年

解答

【文章例①】

十九世紀に発展した生物進化論は、社会進化論に大きな影響を与え、二十世紀になるとナチズムの思想をも合理化するようになった。生物進化論と社会進化論は、もともと密接につながっていた。例えば生物進化論の「適者生存」や「生存競争」は、資本主義の理念である「自由競争」に由来していたし、ダーウィンやウォーレスの生物進化論は、マルサスの「人口論」の影響を受けている。

しかし、次の段階として逆に、生物進化論が社会進化論にフィードバックされることになる。生物進化論、すなわちダーウィニズムは、西欧思想圏にとって、地動説に続く衝撃であった。人間の特性は相対的・比較的なものでしかない、というダーウィニズムは、キリスト教、社会主義、「天賦人權論」など人間を平等視する思想を次々と批判した。そして、遂にダーウィニズムの思想家は人種の優劣をも生物学的に論証しようとし、チェンバレンはゲルマン民族の優秀性を唱え、ダーウィンの弟子ゴルドンの「優生学」は「人種改良」を考案した。このようにして、生物進化論は、科学の名のもとに、「人間」が「人間」の素質を判断し操作する思想を社会科学の中に注入したのである。

私は、社会進化論は、その理論的帰結が不当であり危険なため、到底支持することができない、と考える。

生物進化論は、地球が誕生して以来、どのような生命がどんなプロセスを経て人類になったのか、という事実を科学的に解明しようとする限り、なんら問題がない。生物進化論が正しいのか、正しくないのか、自然科学が仮説を論証しつつ決定すればいいのである。しかし、それを社会科学に単純に当てはめて、人類の中に優劣があり「優勝劣敗」がある、とする考え方は、すでに克服された考え方である。ダーウィニズムは、過去に生物が進化の歴史を遂げた、という歴史の説明をめぐる理論であるが、それが社会科学に応用され

た途端に、「優れた者が勝ち、劣った者が負けるべきである」という将来についての規範理論となる。そして、何よりも人種に優劣があることは現在証明されていないし、何をもって優劣か、という基準は相対的である。さらに、そのような規範理論は国内・国際社会に亀裂や紛争を招く。

以上より、生物進化論の社会科学への応用は、理論的にも無理があるし、不当な帰結を招くために、支持することはできない。

【文章例②】

課題文によると、下等動物から高等動物へという価値尺度上の展開を経て生物は進化するというダーウイニズムは、十八世紀の啓蒙思想や産業革命により生じた社会進化論に支えられていた、という。社会進化論とは、人間の歴史や社会の変化は、人間自身による良い方向への進歩の歴史であるとする思想だ。人間の特異性を相対化するダーウイニズムは、西欧社会においては、それ自身、人間の問題として扱われるようになり、その結果、人類の社会思想領域に逆にダーウイニズムがフィードバックする事態が生じた。それが「人間の手による人間の人為淘汰」という優生学的思想の合理化さえ行なわれるような、危険で注意すべき状態をもたらした。

ダーウイニズムによって、人間は何も特別な存在ではなく、他の生物と同じ存在なのだということを認識したはずの西欧社会において、その後、課題文中にあるように、人間が人間を「生きるに値しない」と決めつける優生思想が生まれた。そこに「生物進化論が社会科学に与えた影響」を見出すことはそう難しいことではない。

そもそも「生物進化論」の中の「最適者生存」の「最適者」とは、環境に適応できなかったものは死滅し、適応できたものが生き残るといふ自然による選択作用の枠で考えられたものである。それが、人間社会にそのまま応用され、あたかも「社会」は「自然界」と同様であるかのように社会科学者は幻想を抱いてしまった。「社会」は人間と人間の価値がぶつかり合う場であり、神が支配する「自然」ではない。

また、その幻想は、白人は他人種より優秀であるという人種差別思想や、未開の人種を支配し啓蒙することが白人の文明の使命なのだという植民地主義の正当化に悪用されたことも、事実である。そしてそれを西欧の社会科学がきちんと対象化しているかというところ、かならずしもそうではない。そしてそれは西欧近代や社会科学だけの問題ではない。日本の社会科学研究者や政治家の中にも、「日本がアジアに進出したことがアジアを発展させた」と発言する者が存在する。そこから考えると、「生物進化論が社会科学に与えた影響」は、実は西欧近代を指標としてきた日本の問題でもある、と思えてならない。

1 設問要求

- ① 課題文を読み、「生物進化論が社会科学に与えた影響」についてまとめる。
- ② ①を行った上で、自分の考えを論述する。
- ③ 一〇〇〇字以内にまとめる。

2 問題へのアプローチ

- ① 課題文を読み、「生物進化論が社会科学に与えた影響」についてまとめる

「生物進化論が社会科学に与えた影響」についてまとめるよう要求されているのだから、それをポイントに読解していくことは言うまでもない。では、どのようにして読み進め、まとめていけばよいか。

本課題に限らず、ある程度の長さの課題文が提示されている時は、文章の構造を把握し、どこに何が書かれているのか整理するつもりで読むとよい。その際の一番大きなヒント（ポイント）が、設問文の中に含まれている（ことが多い）。

(a) 課題文の構造

《「生物進化論」と「社会進化論」との強い関連》（第①～③段落）

課題文筆者の関心対象：十七世紀から十八世紀の時期の、地球、生物界、人間社会の歴史観

《その分析》

地球・自然界の歴史的展開は既に当然のこととして認知

大切な点：自然界の歴史的展開は、進歩すなわち「悪い状態から良い状態へ」という価値スケールの中で考えられていた

わけではない。むしろ、自然は人間の墮落に見合うように神が悪い状態に造り変えており、その積み重ねが最後の審判にいたる、という考えが強かった。

十七世紀までの「神の支配する自然」という考えを持つ終末論的悲観論

←

十八世紀の「人間の支配する自然」という考え方の楽観主義への転換

その内容：地球・生物界・人間社会の歴史は、「悪い状態から良い状態へ」の「進歩」の歴史という考え方
それをもたらしたものの：啓蒙主義と産業革命

その背景：「進歩」の思想のヨーロッパ世界の支配の始まり

(↓歴史は人間の手で築くものであり、世界の歴史は良い方向に常に進んでいる)

◎「生物進化」思想(下等動物から高等動物へという価値尺度上の展開)を下から支えるもの

…世界の歴史は人間の手によって良い方向へという「進歩」思想

《分析の成果》

「生物進化論」は「社会進化論」と密接に関連している。

それを裏付けるもの…進化論の概念が資本主義の理念としての「自由競争」に由来していること。

・ダーウィンの「生物進化論」のきっかけが社会学者としてのマルサスの『人口論』であったこと。

《「生物進化論」と社会科学との関連の具体的説明―ダーウィニズムと西欧近代社会思想》(第④～⑧段落)

(前半)ダーウィニズムによってもたらされたもの①

・西欧的思想圏が近代に被った衝撃：

(1) 地球(人類の棲家としての)の特権意識を崩壊させたもの↓コペルニクスに始まる「地動説」

(2) 「人間」の特異性(≡「人間」は神から嘉された特別な存在)・人類の特権意識を打ち壊したもの

↓ダーウィニズム(「人類」は特別な存在ではなく、他の生物と同じ起源から同じようなメカニズムで変化してきたも

のでしかないという考え)

西欧近代思想の中枢を占めていたヒューマニズム：「人間中心」で「人間」を自然や他生物とは完全に切り離し、全ての基礎に置くという考え方。

← ◎ダーウィニズムにより、打ち壊されて得られた考え方＝人間の特異性も、単に相対的・比較的なものでしかない。

← ・西欧社会が持つに至った強い傾向：ダーウィニズムを、「人間」あるいは「人類」の問題として扱うようになる。

(後半) ダーウィニズムによってもたらされたもの②

・西欧社会におけるダーウィニズムを人間の問題として扱う傾向：

◎ダーウィニズム自身が、人類の「社会」的問題を扱う思想領域へ逆にフィードバックする事態を生じさせる。

その具体例：・『種の起源』以降の、「最適者生存」の「最適者」概念を恣意的に解釈し、倫理・社会思想への応用を試みる姿勢の拡大。

・「科学」の名の下の社会主義批判の横行や、ダーウィニズムの名の下の「天賦人權論」などへの攻撃。

チェンバレンの『十九世紀の基礎』：人種の優劣の生物学的証明・「優勝劣敗」の示唆

ゴルトンの「優生学」：遺伝的操作による「人種改良」「人間の進化」の問題

《課題文筆者の基本的な考え》(第⑨段落)

◎「人間」がその素質の善・悪を判断・操作する思想……きわめて危険。

◎(その一部が科学理論に基づく「優生学」的な)「人間の手による人間の人為淘汰」思想の合理化……注意すべき。

【補足説明】

■ (生物) 進化論

ダーウィニズムあるいはダーウィン主義とも言う。生物の種が累積的な変化の過程を経て、下等なものから高等なものへと発展してきたことを主張する学説。イギリスの博物学者であるダーウィン（一八〇九～一八八二）によって科学的に確立された。その主著で一八五九年に刊行された『種の起源』は、生物進化論の古典である。ダーウィンの進化論の中心概念は、「自然選択（自然淘汰）」である。それは、環境に適応したものは生存し、そうでないものは死滅するという、自然による選択作用を意味する。ほぼ同義のものに、「適者生存」（生存競争の結果、環境によく適応できたものが生存を許される）がある。

（参考資料『倫理用語集』山川出版社）

■ 社会進化論

社会ダーウィニズムあるいは社会ダーウィン主義とも言う。生物進化論の社会科学分野への大きな影響は、人間社会をも自然現象の一部として観察する方法を生み出した。特に、それは社会を、生物的有機体と比較し、それとの類似によって説明する社会有機体説として展開された。この社会進化論では、社会の変動・歴史的变化を対象として、それらは必然的なものとみなされ、生存競争が承認される。資本主義社会における富の不平等や戦争を合理化する役割を果たした。これを説いた代表的な学者は、イギリスの哲学者、スペンサー（一八二〇～一九〇三）である。（参考資料『倫理用語集』山川出版社・『現代政治学小辞典』有斐閣）

(b) 「生物進化論が社会科学に与えた影響」についてのまとめ

(a) 「課題文の構造」で示してきたように、この課題文の展開を「生物進化論と社会科学」との関連に焦点をおき読解していくと、以下の項目が読み取れるであろう（◎部分にターゲットをおく）。

- (1) 「生物進化論」は、十八世紀の啓蒙主義と産業革命により生じた、人間社会・世界の歴史は人間の手により良い方向に進んでいるという進歩思想である「社会進化論」により、下から支えられてきた。
- (2) ダーウィニズムは、人間の特殊性も単に相対的なものでしかないという考え方を西欧社会にもたらし、「人類」の問題として扱われるようになる。
- (3) (2)の結果として、ダーウィニズム自身が、人類の社会問題を扱う思想領域へ逆にフィードバックする事態が生じた。
- (4) そうした事態が、人間がその素質の善悪を判断・操作する思想や優生学に根ざした人間の手による人間の淘汰を合理化することをもたらした。それは危険で注意すべきものである(と、筆者は考えている)。

この四点をできるだけ簡潔かつ自然な文にまとめてほしい(基本的には、「要約」をする時と同様、できるだけ課題文の中の言葉を活用し、課題文の論の展開に沿った形でまとめよう)。

なお、このまとめには、一〇〇〇字のうち、どの程度使うべきか迷うだろう。だが、やはりメインは、「あなたの考えるところを述べ」ることなので、このまとめは、せいぜい三割ぐらいが目安である。

② 自分の考えを論述する

(a) 基本的な手法

①で課題文を読み、そこで筆者が述べてきたことを、「生物進化論が社会科学に与えた影響」というポイントに応じて読解・要約してきたわけだから、その筆者の論述・見解に対する自分の立場を明確にした上で、自分の論考の糸口を探っていくという方法が一番オーソドックスである。

特に、ダーウィニズムが人類の社会的問題を扱う思想領域にフィードバックすることにより、「きわめて危険で」「注意しなければならぬ」状況がもたらされた、という最後の部分(筆者の基本的な考え・判断)に同意するかしないか、自分なりに考え論述していく方向でまとめることが容易であろう。

しかし、その際、気をつけてほしいのは、「生物進化論」が「社会科学」領域にフィードバックする、とはどういうことなのか、（*2）そもそもその「社会科学」とはどういうものなのか（*1）、そしてその「生物進化論」が「社会科学」領域にフィードバックすることにより、どうして人間自体の優生学的判断・操作という「危険」で「注意しなければならない」状況がもたらされてしまったのか（*3）、という点について、じっくり考えること。

【さらに考えるべきこと】

*1 そもそも「社会科学」とはどういうものか

「自然科学」「社会科学」「人文科学」という言葉を、我々は、やはり大学受験に関連するものとして頻繁に使う。しかしいざ説明するとなかなか難しいが、ここではあまり厳密な意味での定義・説明をしようと思わずともよい。

「生物進化論」が、生物の種の変化を近代（自然）科学の枠組みから観察・分析・証明しようというプロセスの研究対象としてきたものであるということと比較すれば、まさに、社会科学とは、自然界を対象とするのではなく、人間のうごめく社会における様々な問題・現象を対象とする学問、あるいは、社会問題、社会現象の見方・考え方と考えるよいだろう。

【補足説明】社会科学：社会現象を対象とする科学。近代科学としては、政治学・社会学・経済学等々と分化した複数の学問の総称。

（参考文献『現代政治学辞典』有斐閣）

*2 「生物進化論」が「社会科学」領域にフィードバックするとはどういうことか

*1でも述べたように、「生物進化論」（ダーウィニズム）は、自然界の生物およびそれに関わる現象を対象にして得られた学説である。それが「社会科学」領域にフィードバックする、ということは具体的にどのようなことなのか、考えてみよう。

十八世紀当初、「社会進化」思想が、「生物進化論」の基盤となり、発想のヒントや概念枠組など、要するに、研究対象の見方・考え方を提案してきたように、今度は、「生物進化論」が「社会科学」領域に研究対象の見方及びそれについての考え方（発想・概念枠組含む）等を提供するということだろう。

*3 *2により、なぜ筆者の言うような「危険」で「注意しなければならない」状況もたらされるのか。

課題文中にあるように、「ダーウィニズム」を生物一般の問題としてよりは、人間（人類）の問題として論議し、そして人間の「社会」的問題を扱う領域にその思考プロセス・概念枠組などを逆利用（応用）することにより、どうして筆者の言うような「危険」で「注意しなければならない」状況もたらされるのか。この点について粘り強く考えることは非常に重要である。

詳述はしないが、いくつか言及してみよう。まず第一に、近代（自然）科学が、「神の支配する自然」の中の生物の進化を対象に用いた枠組を、社会的問題や社会現象に同じようにそっくりそのまま本当に応用できるのか、それは妥当なのか、という点を考えなければならぬだろう。

また、生物進化論の中の「最適者生存」の「最適者」という概念を、「きわめて恣意的に、自分の都合のよいように解釈して、それを倫理や社会思想の面に応用しようとする」態度が急速に拡大していった様子が課題文中でも言及されていた点に着目してほしい。生物進化論の概念枠組の応用の仕方あるいは応用する側の姿勢に、問題はないかどうか、検討すべきであろう。

特に、「人間は特別な存在ではない」ということを、その生物進化論により認識したはずなのに、近代西欧社会では、いつの間にか、ダーウィニズムを、生物全体ではなく「人間」「人類」の問題としてのみ扱うようになった。さらには「最適者」とは誰なのか、どういう条件を備えた者なのか、という非常に「価値」に密接に関わる問題を、「神」の代わりにある一部の人間が「神」になりかわって扱うようになっていった点を、しっかり見つけてほしい。

(b) 出題者側の意図を考える

(a)で述べてきたようなことを考えた上で、論述を展開するのもよいが、自分なりの発想や自分なりの視点からユニークな論述展開をしていく努力も必要になってくる。その意味でも、「今どうしてこのテーマなのか」「大学側はこの課題を通じて受験生のどのような姿勢を見たいのか」と、自らに問いかけてみるのが大事だろう。

慶應義塾大学・法学部の課題であるという文脈を考慮すると、「社会科学」と「自然科学」の関わり、近代科学の抱える問題（近代）という時代への関心）、そして科学としての学問に携わる人間としての知的好奇心・問題意識等、いろいろ挙げる事ができると思う。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--